

## 「過去の克服」から「プーチン理解者」追及へ

—ウクライナ問題を巡るドイツの思想状況

今野元（愛知県立大学）

### <報告の命題>

1. 政治思想研究の課題は、思想内容の分析だけではない。その思想が政治にどのような影響を与えていくかも、政治思想研究の考察対象である。その意味で、政治史研究と政治思想史研究とは相互補完的な関係にある。
2. 政治思想研究の課題は、国内政治思想の分析だけではない。国際政治思想は、政治思想研究の重要な課題である。ナショナリズム思想研究は、国際政治思想研究の一つである。
3. 個人であれ国家であれ、あらゆる主体は歴史的文脈のなかに存在している以上、それらがみな同じ価値判断をすることはあり得ない。価値判断は、個人が自分の置かれた文脈に照らして行う決断であり、その本質は情緒的である。国家のような団体の場合には、政権を担っている者、あるいは政治に参画する権利のある人々の価値判断が、国家の価値判断とみなされる。これに対し「普遍」的価値論とは、このように価値判断の主体が個人であることを否定する、「価値不自由」な考え方である。「普遍」的価値論とは、正しい価値は一つであり、それを選択の余地なく全人類が信奉することをよしとする発想である。
4. 西欧的価値が「普遍的価値」とみなされる現代の国際世界は、階層的秩序である。西欧的＝「普遍」的価値は、常に西欧諸国でヴァージョン・アップされており、それを非西欧諸国がインストールするという構図は変わらない（ドイツは、西欧的＝「普遍」的価値の学習国から牽引国へと変容したが、それでも世界の否定的先入観をいまも拭えずにいる。日本もそうだが、多くの場合役割の変更は困難である）。西欧諸国の一部勢力が主張する価値が、人類に対し普遍妥当性を有するとみなされる世界では、この西欧的＝「普遍」的価値を信奉しているか否かで、個人間、国家間に階層関係ができる。一旦西欧的＝「普遍」的価値への帰依において劣るとみなされた個人、国家は、あらゆる面で際限ない否定的先入観で見られ、下位に位置付けられることになる。その扱いが、否定された側の憤激、居直りを生むことも少なくない。自由が不自由を、平等が不平等を、寛容が不寛容を作り出すという構図が、そこにはある。そこにこそ、ナショナリズム

が生まれる原因もまたある。

5. 世界大戦はこの階層秩序における不満の爆発であり、「信念の戦争」(Glaubenskrieg: ヴェルナー・ゾンバルト)として展開されてきた。第一次世界大戦、第二次世界大戦は、西欧的＝「普遍」的価値を掲げる西欧諸国による、日独討伐の戦いとなった。この戦争を通じて、西欧的＝「普遍」的価値は世界で拡大・深化し、日独は西欧諸国の補完勢力・弟子の扱いとなった。東西冷戦は、西欧的＝「普遍」的価値のなかで自由を重視する自由主義＝資本主義圏と、平等を重視する社会主義圏との対立だった。この二項対立は、社会主義圏が崩壊したあと、勝利した自由主義＝資本主義圏のなかで、米流「保守とリベラル」(佐々木毅)の対立に受け継がれている。

6. ロシヤ・ウクライナ戦争は、第三次世界大戦の天王山である。西欧勢力は、その補完勢力である日本も含め、ロシヤは西欧的＝「普遍」的価値の敵、ウクライナは友だとみなし、白黒図式で見ること止めない。それとは合わない学説、報道は、登場しても速やかに忘却されていく。この戦争がウクライナの勝利に終われば、1918年、1945年に見られたような、西欧的＝「普遍」的価値の地滑り的な拡大・深化が、東欧のみならず世界でみられるだろう。逆にロシヤが勝利すれば、西欧的＝「普遍」的価値の權威が揺らぎ、西欧諸国と対峙する勢力が世界で割拠するだろう。

7. 熱狂的ウクライナ支援派の「プーチン理解者」狩りも、ウクライナ支援懐疑派の及び腰も、ともに戦後ドイツの産物である。前者は、68年世代の系譜を引き、「過去の克服」の論理的延長上で国内外の敵を攻撃しているのである。後者は、二度の戦争に敗れて主体性を失い、自主自立の対外政策を行うことができなくなった戦後ドイツ人の精神構造を継承している。